

# 台湾における朝ドラの受容 — 『あまちゃん』 視聴者へのインタビュー調査を中心に — Reception of Asadora in Taiwan: focusing on In-depth Interview of *Amachan*

黄 馨儀  
Hsinyi HUANG

台湾中国文化大学日本語学科 助理教授  
Chinese Culture University Department of Japanese Language and Literature Assistant Professor

**要旨** 本研究はNHK朝の連続テレビ小説（以下、朝ドラと略する）の海外受容を探り、台湾での朝ドラ視聴状況及びその感想を明確にすることが目的である。黄（2015）が掲示板の書き込みに対する調査に基づき、研究対象を話題の高い作品『あまちゃん』（2013）に選出し、視聴者へのインタビュー調査を行うことにした。インタビュー14名に対し半構造化インタビュー調査の形をとり、研究者が話題を導入し、インタビューに自由に意見を述べてもらった。①「台湾の視聴者は如何に『あまちゃん』を視聴したか」②「台湾の視聴者は如何に『あまちゃん』を理解しているのか」③「朝ドラシリーズに関する理解」④「日本のテレビドラマに関する視聴及び理解」の4つの側面から質問した。結果として、当番組の魅力は脚本にあると考え、主役より脇役に共感すると回答する人が多い。さらに台湾の朝ドラの視聴者は朝ドラをテレビではなくインターネットを通じ自分の好きな時間に好きな回数だけみるという特徴がある。また、台湾の視聴者は『あまちゃん』といった日本のドラマをみることで日本文化を理解し、日本への認識を構築している傾向がある。台湾の「哈日ブーム」が去ったと思われる現在でも、熱心に日本のテレビドラマを毎日視聴し、日常生活のひとつと言う人がいることから考えれば、日本のテレビドラマをはじめとする日本文化はすでに台湾で日常化していると言えよう。

**キーワード** 朝ドラ, 朝ドラの海外受容, あまちゃん, インタビュー調査, オーディエンス研究

## 1. はじめに

朝ドラは日本の「国民的番組」と称され、1961年の初放送以降、50年以上に渡り放送されているテレビドラマシリーズである。日本国内だけではなく、多くの作品が海外に輸出、放送されている。その中でも朝ドラの代表作といわれる『おしん』（1983）は80年代から90年代にかけて、世界64カ国で放送され、アジア諸国を中心に大きな話題を引き起こした。台湾での朝ドラ放送は90年代の「おしんブーム」がその始まりとされ、2010年の『ゲゲゲの女房』の人気をきっかけに、日本の番組を専門に扱うチャンネル「緯来日本台」が続々と朝ドラ作品を放送するようになった。朝ドラの人気再燃の現象に注目した黄（2015）は、緯来日本台公式ホームページに設置された掲示板「討論区」<sup>1</sup>の書き込みを分析した。次節では朝ドラの先行研究や台湾における朝ドラ受容に注目しつつ、本研究の問題意識を明らかにしたい。

## 2. 先行研究

### (1) 朝ドラに関する国内・海外研究

朝ドラに関する研究は、70年代の朝ドラ及びその視聴者を調査した牧田（1978）をはじめ、80年代には「『おしん』ブーム」を中心に研究が蓄積されていた。単一作品に対する研究のほか、黄（2014）は朝ドラの番組特徴を時系列に沿ってまとめ、朝ドラに描かれている女性像及びその社会的機能を中心とした研究を行った。90年代後半には欧米を中心に海外でも朝ドラに関する研究が行なわれてきた<sup>2</sup>。またYano（2010）は2002年のハワイ在住の日系女性を主人公とした作品『さくら』の制作側から消費者側までのメディア効果を検証した。一方、台湾における朝ドラ研究は、90年代に『おしん』の視聴者受容を中心に調

査した林（1996）のほかはほとんど手付かずの状態である。筆者は2015年に台湾の緯来日本台に注目し、朝ドラ受容を調査した。次に、台湾での朝ドラの受容をまとめる。

## (2) 台湾における朝ドラ受容

台湾は朝ドラの放送の歴史が長く、1993年に「有線電視法」が施行され日本の番組の放送が合法となった翌年の1994年に「中国電視公司」<sup>3</sup>が『おしん』の版權を購入・放送したのが始まりである。「おしんブーム」を巻き起こし、「おしん精神」という流行語を生み出した『おしん』の放送は、現在にも通じる社会文脈となった。黄（2015）の研究結果に基づき、本研究では台湾における朝ドラ放送を、『おしん』が放送された1994年前後を第一期、2010年以降の「緯来日本台」で集中的に放送される時期を第二期とする。

2010年以降の「緯来日本台」での放送に注目した黄（2015）は緯来日本台の公式インターネット掲示板「討論区」を対象に、作品ごとにコメント数を記録し、分析した。その結果、『あまちゃん』『カーネーション』がそれぞれ940件と780件であった。これらは再放送の回数も多く、近年台湾で最も人気のある朝ドラ作品であると考えられる。コメントの内容を分析した結果、『あまちゃん』はインターネット上で視聴した経験のある視聴者が多かった。『あまちゃん』は朝ドラの第88シリーズであり、劇中に使われた「じぇじぇじぇ」という驚きを表す言葉は日本で2013年の流行語大賞となったほどの人気だった。日本のあまちゃんブームを受け、台湾では2013年11月に緯来日本台が放送を開始した。黄（2015）の分析結果を踏まえ、本研究では台湾の朝ドラ視聴者の現状を明らかにするため、視聴者の視聴経験、個人経験をより深く調査できるインタビュー調査を行う。

台湾では90年代に「哈日ブーム」が起こり、2005年以降は次第に韓流ブームに取って代わられたと言われている。本研究では、台湾での日本のテレビドラマ視聴の現状も意識しつつ、朝ドラの視聴者に対し調査を行う。

## 3. 調査手法

### (1) 研究対象及び調査方法

視聴者に関する研究はオーディエンス研究の側面から、アンケート調査、インタビュー調査を含む様々な質的及び量的調査の手法がある。斉藤（1998：35）はJensen & Rosengren（1990）の論文を引用し、問題関心に基いてオーディエンス研究の領域は①効果研究、②利用と満足研究、③文芸批評、④カルチュラルスタディーズ、⑤受容分析の五つの潮流に分けられると指摘した。台湾における朝ドラの受容を観察する本研究は、⑤の受容分析に当てはまると考えられる。本研究は、黄（2015）によるインターネット掲示板の分析の結果、最もコメント数が多い『あまちゃん』の視聴者にインタビュー調査を行う。

- ・ インタビュー調査(in-depth interview)：インタビュー調査は定性調査の一つであり、量的研究の調査票調査・アンケート調査と比べ、台湾の視聴者がなぜ、どのように朝ドラを視聴し、理解しているのかを深く知るために有効な方法であると考えられる。
- ・ インタビュー方法：2016年1月に台湾の掲示板サイト「PTT」<sup>4</sup>に「『あまちゃん』及び『カーネーション』の視聴者募集」と掲示し、インタビューを募集したところ、3日間で約30人から連絡が入った。視聴者個人の感想を知るために、個人インタビューを行った。半構造化インタビューの形を取り、研究者が話題を導入し、決まった項目に回答してもらうだけでなく、インタビューに自由に意見を述べてもらうことで視聴者の感想を聞き出す。
- ・ 実行人数・場所及び時間：2016年3月から7月にかけて、台北及び高雄にて『あまちゃん』の視聴者13名に対して行った。

### (2) インタビュー調査に関する研究方法

台湾の視聴者がいかに朝ドラを視聴し、理解しているかについてのこれまでの研究は、林（1996）が行った『おしん』の台湾視聴者へのインタビューのみである。一方でここ10年、日本と韓国のテレビドラマの受容は高く注目されており、中でも李（2006）は「チャングムの誓いに関する台湾視聴者の受容分析」で、台湾における海外ドラマの受容に関する研究方法を詳しく述べた。受け手調査は受け手の反応だけではなく、①視聴者それぞれの社会の立ち位置、②視聴した当時の環境、③あらゆる社会・文化・個人経験といった条件の違い、④文化的差異に注目すると効果的であるという李（2006）の研究を参考に、本研究はインタビューの結果をまとめる。

## 4. 調査結果及び分析

前述の方法で募集した約30名の視聴者のうち、『あまちゃん』の取材を受けたいという連絡があった約25名とメールで連絡を取り、取材したインタビューは以下の14名である。年齢層は20代から30代に集中しており、男性より女性のほうがやや多く、ほぼ大学卒業以上の学歴である。

インタビュー	性別	取材地	出身	年齢	学歴	日本のドラマ視聴歴
No.1 さん	女	台北	台北	31	大学卒	10年以上
No.2 さん	女	台北	台北	25	大学卒	10年以上
No.3 さん	女	台北	彰化	20	専門学校生	3～5年
No.4 さん	女	台北	台中	22	大学生	3～5年
No.5 さん	男	台北	台南	36	大学卒	10年以上
No.6 さん	男	台北	澎湖	36	専門学校卒	10年以上
No.7 さん	女	台北	台北	21	大学生	5～10年
No.8 さん	女	台北	高雄	29	大学院修了	10年以上
No.9 さん	女	台北	新竹	27	大学院修了	5～10年
No.10 さん	女	高雄	高雄	18	専門学校生	1～3年
No.11 さん	男	高雄	高雄	24	大学卒	5～10年
No.12 さん	女	高雄	台北	25	大学院修了	10年以上
No.13 さん	男	高雄	高雄	38	大学院修了	5～10年
No.14 さん	女	台中	台中	24	大学卒	1年

前述のとおり、半構造化のインタビューを実行するが、台湾の朝ドラ視聴者についての初歩的な調査であるため、①「台湾の視聴者は如何に『あまちゃん』を視聴したか」②「台湾の視聴者は如何に『あまちゃん』を理解しているのか」③「朝ドラシリーズに関する理解」④「日本のテレビドラマに関する視聴及び理解」の4つの側面から質問する。質問の順番にはこだわらず、インタビューと自由な会話をを行い、できるだけ自由に感想を述べられるようにする。本稿ではインタビューを以下の4つのレベルから分析し、まとめる。

#### (1) 『あまちゃん』と朝ドラの視聴習慣について

##### 1.1. 口コミ効果

インタビューが『あまちゃん』を見始めたきっかけはネット上の口コミが大きいとみられる。

「当初PITの日劇版<sup>5</sup>での議論がすごくて、面白そうだから見始めた。」(NO.1 女性、31歳) (NO.4、女性、22歳) (NO.7、女性、21歳) (NO.11、男性、24歳)。「普段から朝ドラを見る習慣がある」(NO.2、女性、25歳) (NO.12、女性、25歳)「兄が日系企業で働いているため、いつも日本のテレビドラマを勧めてもらっている。『あまちゃん』も兄の勧めで見始めた」(NO.3、女性、20歳)。「ネットの情報で知って、主役の能年玲奈が出ているから見始めた」(NO.5、男性、36歳)。「日本に留学している友人の紹介で知った。」(NO.6、男性、36歳)。

##### 1.2 正規放送よりインターネット視聴

NHKの衛星放送や緯来日本台の正規放送より、ネット上での視聴のほうが好まれるという傾向がある。インタビューの回答は以下のとおりである。

「NHKだと字幕がなくて、インターネットで見た方が早いから、週に1回ぐらいのペースで見た。緯来の放送は紅白歌合戦の特集編だけを見た。」(NO.1 女性、31歳)。「1回目はネットで見て、2回目は緯来日本台で見た」(NO.2、女性、25歳)。

「NHKの放送で見た。字幕がなくても見たい。見たときは高校生だったから、朝出かける前に見て、わからなかった部分はまたネットや緯来日本台の再放送で見た」(NO.3、女性、20歳)。「携帯を使ってネット経由で2回見た。好きなシーンは録画して繰り返して見た」(NO.4、女性、22歳)。「ネットで見た。視聴当時はちょうど仕事の関係で台東の田舎にいたから、ドラマの設定にとっても共感できた。」「緯来の放送は知っているが、わざわざテレビをつけて見たことがない。そもそも放送の時間帯は自分の帰宅の時間に合わないから」、そして「このドラマがとても好きなので、好きなシーンは繰り返して見ていた。10回ぐらい見たかな」(NO.5、男性、36歳)。「ネットで見た。緯来日本台での放送は夜8時か9時だろう。やはり時間的に不便だから」(NO.6、男性、36歳)。

11及び12の回答からインタビューの多くはネット上のカリスマ評論者のコメントをきっかけにドラマを見始め、そのほかは友人や家族の口コミや、もともと日本のテレビドラマ(朝ドラ)を見ているから見始めたことがわかった。また、台湾の視聴者の多くは、緯来日本台での放送時間は不便で広告が多い、インターネットで最も早く視聴できる、正規の放送を待たないといった理由で、インターネットでの視聴を選んでいる。これらはインターネットの普及による視聴者の行動の変化と、台湾でDVD録画システムが浸透していないことが原因であると考えられる。

## ②『あまちゃん』についての理解

### 2.1. 主役より脇役の人気の高い

調査結果から、インタビューの多くはヒロインのアキより、脇役を好むことがわかった。以下のように、ヒロインのアキは可愛い、わがまますぎて好きにはなれないといった発言があった。

「アキは可愛いけど、ユイのほうがずっと好きだ。アキはあまり自己主張しないため、人に影響されやすい。夢をずっと見ているガキみたいだから、見ていてイラッとする。」「ユイは芯が強く、きちんと目標があって最後まで貫く」「現実面から言えば、アキは若い頃みんなが夢を見るときのイメージ、ユイは夢を追いかけて失敗した後の象徴」(NO.1 女性、31歳)。

「アキも可愛いけど、マネージャー水口が好きだ。僕はメディア産業で働く経験があるからか、このドラマを見たとき、マネージャーの立場になりやすい。」(NO.5、男性、36歳)。「夏ばっばが一番好きだ。とても強くて、生き方がカッコいい女性だから」「アキという役はあまり好きじゃない」(NO.2、女性、25歳)。「アキはちょっとわがまますぎる。もし実際にアキのような友人がいたら困るかも。春子ママも好きだけど、夏ばっばが一番好きだわ。「去る者追わず」という人生の名言は自分の心に響いた」(NO.3、女性、20歳)。「アキはわがまますぎる。彼女は周りの人に可愛がられているから、成功した。実生活に本当にアキのような人が居たら、いらいらするかも」。「ユイが好き。プライドが高くて、自分の考えをしっかり持っている。そしてなぜかこのドラマで一番悲劇的なキャラクターだから。気になる存在」(NO.4、女性、22歳)。「夏ばっばが好きだ。厳しくて、人に対してストレートな性格が好き」(NO.6、男性、36歳)。「夏ばっばが好きだ。素直じゃないけど、愛がある。自分もこのようなおばあちゃんが欲しい」「アキのこと、あまり好きじゃない。ちょっとバカ」(NO.7、女性、21歳)。「アキが好きだ。だって可愛いだろう」(NO.11、男性、24歳)。「アキが好きだ。顔がタイプ。」(NO.12、男性、38歳)。

ヒロインのアキに好感を持つインタビューは男性に集中している。それに対し、女性はアキのことを可愛いと評価しつつも、わがままで友人にいたら困ると想像する人がいた。一方で、祖母の夏や親友のユイ、マネージャーの水口にもファンがいることから、多種多様な登場人物がドラマの人気を支えていることがわかる。脇役それぞれが個性的かつ、視聴者の共感を呼ぶ存在感があった。そのため、あらゆる視聴者に対応できるドラマとなっていると考えられる。

### 2.2. 親子三代のマーメイドに注目

多くのインタビューがヒロインのアキと母の春子、祖母の夏の絆に注目していた。例えば、「夏ばっばと春子、この親子の絆についての描き方がとてもよくて、二人は喧嘩ばかりだが、実はとても互いの存在が気になって、特に春子が勝手に家出して、空っぽになった部屋を見た夏ばっばの表情がとても印象的だった。泣いた。」さらに、「春子とアキも、最初は距離感があったが、春子は過保護な母親だと思う」(NO.2、女性、25歳)。「夏ばっばと春子、春子とアキ、ドラマの冒頭では距離感があったものの、アキが夏ばっばに出会ってから、みんなの関係がよくなった気がした」「このドラマを見ているとき、親子の葛藤についてなぜか気になる」(NO.3、女性、20歳)。「アキは夏ばっばと春子の誤解を解くキーパーソン。」「最初の時点で三人は疎遠に見えるが、実は祖母・母・娘この三人の関係がすごく密接している」(NO.4、女性、22歳)。「このドラマの軸は、やはりこの親子三代、親子愛だろう。アイドルの奮闘などのプロセスは、ただの飾りで、このドラマで一番語りたいたいの、この三人の関係回復だと思う」(NO.7、女性、21歳)

以上のように、親子三代の絆に注目するのは女性で、男性は親子間の葛藤や誤解などについて、特に気づいてないと述べた。女性は自分の母親や祖母を連想した、夢を追いかけていた昔の自分はアキのように母親に反対された経験があったと述べた。

### 2.3. 女性像と男性像

インタビューに、春子という母親像と天野家の男性について感想を聞いた。「春子のイメージはこれまで見てきた、想像していた日本の女性像とは違う」(NO.1、女性、31歳) (NO.2、女性、25歳)。「他のドラマでは良妻賢母というか、穏やかな母親像が多いが、このドラマの春子は違うね」(NO.3、女性、20歳)。「春子というキャラクターが好き。彼女が劇中で話した言葉などすごく心に響いた。」「春子は一家の大黒柱のイメージがあり、これまで見た日本のテレビドラマの女性とは違う」(NO.4、女性、22歳)。「春子という役は、自分がみてきた日本のテレビドラマの母親像とは違う。」(NO.6、男性、36歳)。「天野家の男性は存在感が超薄い!」「アキのパパは優しく、これまでドラマでみてきた日本の父親とは違うイメージ」(NO.2、女性、25歳) (NO.7、女性、21歳)。

これまで見てきたほかの日本のテレビドラマでは、女性は大和撫子のような母親像が多く、男性は深夜まで働き、家庭のことに関心を払わないタイプの父親が一般的だったが、このドラマでは逆転していると述べられた。

### 2.4. 脚本家の魅力

脚本と脚本家について、「宮藤官九郎のドラマなら必ず見る。」(NO1 女性、31 歳)「一回目は気づかないが、ネット上の議論を見てから二回目を見ると『なるほど』と思う点が多々ある。脚本家の宮藤官九郎はすごいなと思った」「『あまちゃん』は他の朝ドラと比べて、ドラマの流れがとてもよく、すごく惹かれた」(NO2、女性、25 歳)。「主役だけではなく、脇役にもそれぞれのストーリーがあって、すごく魅力的」(NO4、女性、22 歳)。「このドラマの魅力はまさにドラマの内容自体がよいという部分。人間関係の描き方がうまい」(NO6、男性、36 歳)。「この脚本家のドラマは必ず見る」(NO7、女性、21 歳)といった回答があった。これは11、21に関連しており、ドラマの見所は脚本であると明確に答えるインタビューが多数いた。

### 25『あまちゃん』の魅力とメッセージ

「大きな災害に遭っても挫けないで、頑張ろうとする気持ちが湧いた」(NO1 女性、31 歳)。「ドラマの中では、みんなが郷土を愛する気持ちが強調されている」「『あまちゃん』の中でずっと駅センターに置いてある模型があるよね。すごく精密にできているので、感服した」(NO2、女性、25 歳)。「ドラマのリズムがよくて、海のイメージがとても気分よく、元気もらった」(NO3、女性、20 歳)。「ドラマの景色が綺麗。田舎の景色や人柄が暖かい」(NO4、女性、22 歳)。「社会問題について取り上げているから、とても勉強になった」(NO5、男性、36 歳)「脚本だね。設定のあらゆるところに巧妙さがあり、一つ一つの事件には、その理由があって、後々わかるようになっていくところがとても気に入った」(NO7、女性、21 歳)など、製作側の「復興」のメッセージを読み取り、ドラマの魅力として挙げたインタビューは少なくない。

### (3)朝ドラや日本のテレビドラマについての理解

#### 3.1朝ドラへの関心

朝ドラに高い関心や理解を持つ視聴者は「朝ドラは夢を追いかける女性のイメージを作っているが、女性向けのドラマで、ある程度日本女性の社会状況を反映している。友人から聞いた話では、日本の女性は仕事場ではあまり重視されてなく、かわいそう。朝ドラでもヒロインたちは結婚してから仕事を辞めて、子供を世話しながら自宅で仕事するようになった」と述べた(NO1 女性、31 歳)。

朝ドラの特徴について、「女性に夢を持たせるために作るドラマ」(NO1 女性、31 歳)。「ヒロインのみんなはとても明るくて、うるさいほど元気」「軽快なリズムで視聴できる」(NO2、女性、25 歳)。または「朝ドラのヒロインはみんな明るすぎて、かえってうんざり」(NO4、女性、22 歳)と述べられた。

『あまちゃん』をきっかけに朝ドラを見始めたインタビューが多いが、朝ドラを積極的に理解し、朝ドラのヒロインの特徴について具体的に語る人もいた。ただし、台湾において朝ドラは「日本のテレビドラマを見る」一環として見られている傾向がある。日本の「朝にドラマを見る」感覚とは違い、毎日15分ではなく、一気に一週間分を見る人が比較的多い。これは、今回のインタビューの個人経験、テレビという家庭視聴よりもパソコンでの個人視聴が圧倒的に多いことに関連している。

#### 3.2日本のテレビドラマを介して日本を知る・「知日派」が多い

「中学生からずっと日本のドラマを見てきた。日本のドラマは社会状況を反映しているので、とても楽しんで見ている。」(NO1 女性、31 歳)。「日本のテレビドラマは毎日見る。日常生活のひとつになっている。日本のドラマのシーンや撮影はとても繊細で、学校では撮影の授業を受けたことがあって、『あまちゃん』は過去と現在でシーンの色調が違って、見ていて楽しい。日本のテレビドラマを見ることは勉強になるわ」(NO2、女性、25 歳)。「普段はコメディが好きなので、『あまちゃん』を見て、感動的な部分も多いが、見ていてすごく楽しかった」(NO3、女性、20 歳)。「このドラマを見て、『あま』という職業を知るようになった」(NO4、女性、22 歳)。「日本のドラマは中学生の時からずっと見てきた。日本のドラマは様々な社会問題に関心を持たせる作品が多い。深みがあってとても好き」(NO5、男性、36 歳)。以上のように、日本のテレビドラマを長年視聴しており、日本の文化や事情をさらに知りたいという人が多数いた。

## 5. まとめ

### (1)ヒロインへの共感が低い、このドラマが好き

インタビューの結果、ヒロインのアキへの共感が低いという傾向が見られたが、被取材者がアキと同年代の場合、アキへの反感が強く、「わがまま」で「自分の友人ならいららする」、年上の場合「アキは可愛い、夢を見るのも若いから許せる」と述べていることから、ヒロインへの好感度は視聴者の年齢に関係していると考えられる。また、男女で違いも見られた。脇役に共感する人が多い点からは、キャラクター設定や脚本がよく、あらゆる視聴者のニーズに対応したため人気を博したことがわかる。

### (2)台湾の朝ドラの視聴者とは

今回の調査には『あまちゃん』を見て初めて朝ドラを知った人もいれば、もともと朝ドラというシリーズを知っていた人もいる。放送時間帯が良くないという理由で、テレビではなくインターネットを通して自分の好きな時間に好きな回数だけ見るという特徴があるが、台湾の朝ドラ視聴者それぞれに独自の視聴パターンがあることがわかった。

### (3) 日本を理解する媒介としての「日本のドラマ」

本研究のインタビューでは『あまちゃん』の視聴に加え、朝ドラへの関心や、日本のテレビドラマの視聴歴も質問した。多くの視聴者は5年から10年以上日本のドラマを見ており、また、台湾や韓国のドラマを見る習慣がない。さらに、日本のテレビドラマを見ることは娯楽というよりも「知識の習得」と答え、日本のテレビドラマを介して日本社会・日本文化を理解し、「日本の女性像・男性像」を構築しているという傾向が確認できた。つまり、日本のテレビドラマは台湾の視聴者にとって、日本文化や社会の鏡である。また、「哈日ブーム」が去ったと思われる現在でも、熱心に日本のテレビドラマを毎日視聴し、日常生活のひとつと言う人がいることから考えれば、日本のテレビドラマをはじめとする日本文化はすでに台湾で日常化している。なお、本研究は朝ドラの台湾受容についての初歩的な調査であり、本稿で取り上げたインタビューはインターネットユーザーに限定されているため、今後はさらなる研究対象の選別が必要である。

## 補注

<sup>1</sup>なお、2017年5月をもって緯来日本台のホームページのシステム更新により「討論区」が閉鎖することになった。

<sup>2</sup>Svenkerud Rahoi, "Incorporating ambiguity and archetypes in entertainment-education programming: Lessons learned from *Oshin*", PAULASHARVEY, "Nonchan's Dream NHK morning serialized television novels" (1998), Christine R. Yano (2010), "Becoming Prodigal Japanese: Portraits of Japanese Americans on Japan Television"

<sup>3</sup>「中国電視公司」は、台湾の2局目のテレビ局として1969年に開局した、台湾電視公司及中華電視公司及並び、台湾で最も歴史のある地上波のテレビ局である。『おしん』がゴールデンタイムである夜8時に放送されたことがきっかけで、海外番組の放送が過熱すると国内の劇番組の制作費や芸能人の仕事などが圧迫される恐れがあると、台湾の演芸工会（芸能組合）は抗議した。

<sup>4</sup>「PIT」は台湾で最大級のインターネット掲示板で、生活情報から娯楽まであらゆる分野の掲示板が設置されている。今回のインタビューはPITの「日劇版」（日本のテレビドラマの議論する場）で募集した。

<sup>5</sup>多くのインタビューから「有名な評論者がこのドラマに太鼓判を押したから見始めた」という回答があった。

## 参考文献

- 1) 黄馨儀 (2014) 『メディアの女性文化：テレビドラマにおける女性表象とその社会的意義 —NHK 朝の連続テレビ小説を例に—』同志社大学社会学研究科メディア学専攻博士後期課程学位論文
- 2) 黄馨儀 (2015) 「朝ドラの海外受容—台湾の放送状況及び掲示板の分析を例に—」日本マス・コミュニケーション学会2015年度春季大会予稿集
- 3) 斎藤慎一 (1998) 「メディア変容の時代におけるオーディエンス研究」『マス・コミュニケーション研究』No.53, pp.34-52.
- 4) 牧田徹雄 (1976) 「NHK 連続テレビ小説の考察」『NHK 放送文化研究年報』21号, p.79-94
- 5) 林芳枚 (1996) 《女性主義與社會建構的觀點—女性與媒體再現》巨流圖書公司
- 6) 李佩英 (2006) 《韓劇《大長今》之接收分析研究：男女閱聽人對「長今」角色的解讀》國立交通大學傳播研究所碩士論文